

2017 SGH通信

【1年生配布用】

No.18 岐阜県立大垣北高等学校 SGH 推進部

今までのSGH事業を踏まえて、日本語論文作成を開始します！

本日から、日本語論文（1,500字以上）作成を開始します。後期になってから、言語技術（パラグラフライティング等）、5領域入門講座（2人の大学教官からの講義）、大学院生や有識者へのインタビュー等を通して、論文の書き方や研究の仕方を学んできました。今までの学習を踏まえながら、グループの仲間と共に、リサーチクエストの解決に向けた研究・論文作成を進めていきましょう。

【日程と会場】

	12月15日（金）				12月22日（金）			
	1限	2限	3限	4限	1限	2限	3限	4限
PC1	1組	3組	4組	7組	未定	未定	未定	未定
PC2	6組	2組	5組	8組	未定	未定	未定	未定

【研究の手順概要と注意事項】

■日本語論文作成の前の準備

★ PC1の生徒

メディア共有 → 一時保存用の各自のフォルダ内から「日本語論文フォーム（5領域）」のワード文書がある事を確認
→ ワード文書を開く → 保存してから編集作業を開始する。

【保存方法】文書を開いたら… ファイル → 名前を付けて保存 → 参照ボタンをクリック

出てきたウィンドウ内で「O101 氏名 【5領域】」とつけて保存ボタンを押す ※O101の部分はクラス・番号

【5領域】の部分は、下の7つから1つ選び入力する ※数字は半角で

⇒ 国際開発・国際ビジネス・比較教育・国際医療・環境（再）・環境（水）・環境（農）

★ PC2の生徒

共有 → 一時保存用の各自のフォルダ内から「日本語論文フォーム（5領域）」のワード文書がある事を確認

→ 文書を開かずに、右クリック → 名前の変更 を選択 → 名前の付け方はPC1の生徒を参考に

→ 文書を開いて作業開始

■先輩の論文を参考に型を理解しよう。

①【小見出し1】にはリサーチクエスト1に対応した文言を入れる。（【小見出し2】【小見出し3】も同様）

②【序論】と【小見出し】の間を空けるなどの型を理解する。

■【序論】を書き始めよう。

※書き方については、配布された先輩の例を参考にしてください。短い文章で、論文の全体像を示す重要な書き出し部分です。この際、RQを必ず【序論】の最後に入れるようにしてください。

■【本論】（小見出し1～3）に取り掛かろう。

※必ずしも上から書く必要はありません。書きやすいところから取り組んでください。なお、調べた内容を引用する際には、「剽窃」（盗用）にならないように必ず出典を書いてください。引用した場合は、その都度【参考文献】に書き込んでいくようにすれば、問題が起きることはありません。

平成26年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール（5年間指定）

■データの消失防止は自己責任です。

* 上書き保存を確実に行うこと

■次の段階の目途を持っておこう。

* 12月22日(金)・1月19日(金)で実施する残りの3時間で、1,500字以上の論文を完成させる。

* 1月26日(金)は、日本語論文に基づく、800words以上の英語論文の作成を開始する。

日本語論文 ルーブリック評価（クラス担任・副担任による評価）

段階	項目	不十分な状態(1)	やや不十分な状態(2)	やや満足のいく状態(3)	満足いく状態(4)
日本語論文作成	型の理解 ①序論の最後にRQ1,2,3を列記すること ②序論、本論(RQ1, 2, 3)、結論の形式で書くこと		型の理解が不十分のまま書いている。 (①、②のいずれかしかできていない。)		型を十分に理解し、読みやすく書いている。 (①、②の両方ができている。)
	課題の設定、RQの主張と根拠、RQの関連性 ×2	それぞれのRQに対して主張のみで根拠がない。	RQ1つ1つの主張に対する根拠に対し、1つの事例で説明している。		RQ1つ1つの主張に対する根拠に対し、複数の事例で説明している。
	専門用語の定義と対象を理解して伝えているか。×2 (識字率・都市と農村など)	RQに使われている専門用語の定義を説明していない。	RQに使われている専門用語を説明しているが、地域や状況が漠然としている。	専門用語の定義や設定を分かりやすく説明し、研究のキーワードとしている。	
	日本語論文(価値)×2		「アジアの持続可能性に資する」という観点から、ある程度研究の価値を感じることができる。		「アジアの持続可能性に資する」という観点から、価値のある研究だと感じる。
	自主的な態度	他者の指導に依り、論文作成を行った。	他者の意見を参考にして、論文作成を行った。	他者の意見を理解し、自らの判断力を働かせて、創造性を持って論文作成を行った。	自ら創造的な論文作成を行うに留まらず、他者に積極的に働きかけた上で、有効な助言を与えることができた。